

いぶき

18

2020年3月18日 発行



第18回国際学生セミナー



NTU Summer Program
+N1 Biotechnology

目次

研究科長挨拶	垣塚 彰	2
教員挨拶	中野 雄司	3
受賞：武田医学賞	影山龍一郎	4
中谷賞奨励章	今村 博臣	5
生命科学研究科シンポジウム報告	上村 匡	6
ダイバーシティー推進セミナー	上村 匡、服部佑佳子	7
国際学生セミナーから		8
実践的生命科学英語コミュニケーションプログラムから	金岡 泰哲	9
	早田 信正	10
NTU Summer Program +N1 Biotechnology 参加報告	福田 侑花、吉戸 香奈	11
教員人事異動		13
編集後記		14

ドーパミンと上手く付き合おう！

研究科長

垣 塚 彰

修了生の皆様、学位取得、まことにおめでとうございます。入学以来の皆様の研鑽がここに実を結んだことを心よりお喜び申し上げます。さて、本日は、皆様のこれからの生き方のヒントになるかもしれない話として、脳科学の話をしようにと思います。

脳は、最後のフロンティアと呼ばれるように、謎に満ちあふれた場所です。しかしながら、神経細胞の基本的な機能は、神経細胞の興奮が活動電位としてシナプ스에伝わり、そこから神経伝達物質が放出されるという簡単な回路で行われます。今日、お話ししようと思うのは、脳の回路の1つ、「報酬系」と呼ばれる回路です。「報酬系」では、神経細胞は「腹側被蓋野」という場所にあり、軸索を「側坐核」という場所に投射しています。また、この神経細胞は、ドーパミンを神経伝達物質として使用しています。ワクワクした時やなにかをやり遂げた時、この回路が活性化し、ご褒美として側坐核でドーパミンが放出され、満足感、幸福感を味わうこととなります。それ故、この回路は、「報酬系」と呼ばれます。一度、このドーパミンの放出(成功体験)を経験すると、脳は同等かそれ以上のドーパミンの放出を皆様に要求してきます。これが、やるき、がんばりの動機付けとなり、皆様を次の成功へ導くこととなります。一方、脳は、報酬系でのドーパミンの放出を簡単に得る方法があることを経験的に知ります。古くは、酒、たばこ、ギャンブル、そして最近登場したケイタイに代表されるバーチャルな世界がそれにあたります。しかし、これらで得られるドーパミンの放出は、短期的で長続きせず、深い満足感、幸福感は得ることをできません。従って脳はその刺激を繰り返すことを要求してきます。これが中毒状態で、それ以外のことに興味が無くなり、結果、多くの大切なものを失ってしまいます。

この報酬系でのドーパミンに関わる心理現象に「承認欲求」というものがあります。簡単に言えば、誰かに認めてもらいたい(褒めてもらいたい)という欲求で、本能の一つと言われています。人は褒められると先ほどと同じように「報酬系」でドーパミンが放出され、満足感、幸福感を味わいます。我が国では、ありとあらゆるところでこの「承認欲求」を刺激する環境が溢れており、皆様は幼少時より親、友人、先生に認めて欲しいという「承認欲求」に知らず知らず支配されてきたと思います。最近はやりのSNSで「いいね」が欲しい方はこの「承認欲求」が強いということになりますし、褒められるとモチベーションが上がり、認められないとモチベーションが下がるというのは、まさに、「承認欲求」に支配されている状態です。この「承認欲求」が行動の動機となるとそれは他者の価値観に従って生きることになり、心理学者のアドラ博士は、著書「人生の意味の心理学」の中で、この他者に対する「承認欲求」を捨てるのが幸せな人生を生きる上で極めて重要であると説いています。仏教での「煩惱」とは、まさにこの「承認欲求」を指していると思えますし、「解脱」とはこの「承認欲求(煩惱)」を捨て去ることであると思えます。

結論ですが、皆様の行動の動機付けの多くを報酬系のドーパミンが行っていることを理解した上で、安易にドーパミン放出を促すケイタイや他人に対する「承認欲求」から距離を置き、ドーパミンに振り回されない(支配されない)生活を送って欲しいと思います。一方、前向きな思考でワクワク感をもって物事に取り組むことで、意欲やがんばりを高めて欲しいと思います。さらに、本当に自分がやりたいことを見つけ、その達成に向けて地道な努力を積み重ねることでその目的を達成し、真の満足感と幸福感を得てください。そして、このサイクルを繰り返すことで、素晴らしい人生を歩んで行って欲しいと思います。



ご挨拶

統合生命科学専攻 全能性統御機構学分野

中野雄司

2019年4月1日付けで、統合生命科学専攻 全能性統御機構学分野を担当させて頂くことになりました中野雄司です。本誌面をお借りしまして、ご挨拶させていただきます。

私は、1985年に京都大学農学部に入學し、1994年に京都大学大学院農学研究科農芸化学専攻にて博士号を頂きました。学位研究は、山田康之先生の研究室(当時、京大大学生物細胞生産制御実験センター、その後、同農学部)において指導して頂き、植物の組織培養細胞を用いた葉緑体の機能分化機構の研究に取り組みました。その後、1995年に埼玉県和光市にあります理化学研究所に研究員の職を得まして、アメリカ・ソーク研究所・博士研究員、JST-さがけ・さがけ研究者、理研植物化学生物学研究ユニット・ユニットリーダーなどを兼務しながら研究を進めてきました。この度、ご縁を頂きまして、生命科学研究科の一員に加えていただきましたこと、大変光栄に存じます。

京都大学の学部時代、研究室に入る前には、体育会サイクリング部に所属し、3年生時には100名近い部員の中で主将を1年間務めるなど、かなり熱心にクラブ活動に没頭しました。このクラブは、自転車でのロードレースなどの競技も行いますが、活動ベースは、自転車にテント・寝袋・炊事道具を積んで、日本中を人力で旅行するというもので、研究室に入るまでの3年間、長期休みのほとんどは、日本各地の大自然に分け入り、夜は大地で睡る日々を過ごしていました。このような生活の中で、私たちが暮らす地球は植物に守られ育てられていること、その植物は、冬を経た新緑の時期に一斉に芽吹く姿などに象徴される強い生命力を持つこと、総じてそのような植物の力強い姿、に強く惹かれるようになり、それらの謎に少しでも近づきたいとの思いから、植物の分子レベルでの研究を志すようになりました。

その後、研究手法としては、理化学研究所やその近隣の東京大学で盛んであった植物ホルモン類の生理活性化合物研究、ソーク研究所で当時隆興しつつあった実験植物アラビドプシスを用いた分子遺伝学研究、2000年以降の新しい学問分野として理化学研究所にも研究拠点の一つがおかれたケミカルバイオロジー研究、などを学び、それらの手法を組み合わせながら、植物成長の仕組みを明らかにするという目標に向けて活用する、という志向の元において研究を進めてきました。

この度、このようなご縁を頂き、大変光栄に思っておりますが、研究・教育共に相当な未熟者であることを痛感する毎日でもあり、日々精進を心掛けたく思っております。研究室のスタッフ・学生たちとも力を合わせまして、生命科学研究科の発展に少しでも貢献出来ますよう努力していきたいと思っております。今後共、ご指導ご鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。

武田医学賞を受賞して — 「若い研究者へ贈る言葉」 —



統合生命科学専攻 発生動態学分野

影山 龍一郎

この度、栄えある2019年度武田医学賞を受賞いたしました。身に余る光栄なことで、これまで一緒に研究を推進してくれた研究室のスタッフや学生、並びに共同研究者の皆さんにこの場をお借りして感謝申し上げます。受賞テーマは、「神経幹細胞の制御機構の解明と操作技術の開発」です。大まかな研究内容は、以前にも「いぶき」でご紹介させていただきましたので、今回は受賞のうちに寄稿した駄文「若い研究者へ贈る言葉」を少し短く書き直してご紹介させていただきます。

私は、1991年にHes遺伝子群を発見してから、もうかれこれ30年近くこの遺伝子ファミリーの研究を続けてきました。1991年当時、よもやこの遺伝子を30年も(おそらく一生涯)研究し続けることになるとはつゆにも思っていませんでした。しかし、一つのことがわかると新たな疑問が芽生え、それに答えるとまた次の疑問が、ということを繰り返し、いつの間にか30年近く経ちました。長く続けているといろいろな良いことが起こってくるものです。だんだんと競争相手が減り、むしろ共同研究者が増えてくるのです。多くの遺伝子がそうであるようにHes遺伝子も多くの種類の細胞分化に関わるので、必然といろいろな分野の研究者と共同研究するようになりました。これに伴い、多様な情報が入りました。私の研究にとって最も重要な情報の一つはOlivier Pourquié博士から得たもので、Hesホモログの発現が分節過程で振動するというものでした。彼は私の研究室を訪れてくれて、深夜まで飲みながらディスカッションしました。ただ、そのときは面白い現象だなあと思う程度で、自分はいくまで神経発生を研究するので、分節時計にまでは手を出さないと感じていました。しかし、しばらくしてこのような自律的な振動は分節時計に限らず神経幹細胞などでも幅広く起こっているのではないかと考えるようになり、典型例である分節時計の研究も行い、神経幹細胞と比較して振動の意義を探ろうと決断したわけです。その結果、研究にまた新たな展開がありました。

ここから言えることは、ありきたりですが、まさに継続は力なりということと、いろいろな人との出会いやディスカッションが大事ということです。興味ある遺伝子や現象を見つけたらとことん粘って追求すること、そうすればやがてその分野を切り開いた第一人者になれるということです。一つの遺伝子や現象を30年も追求する人はそんなにいないので、継続さえすれば誰にでもその分野の開拓者になれるチャンスはあります。継続するにはいろいろな**疑問を見つける力**とそれに**答える力**が重要ですが、自分一人で考えていても限界があるので、学会で関連分野や異分野の研究者と積極的にディスカッションすることがたいへん大事です。それに加えて、研究室内でたえず積極的にディスカッションすることが何にも増して重要でしょう。日々議論していくうちにモヤモヤしたものが徐々に形になっていくことをしばしば経験します。振り返ってみると、研究室内の学生とのディスカッションの多くは忘れ去っていきませんが、いくつかキーになったたいへん重要なものが思い出されます。忘れ去ったディスカッションが重要でなかったというわけでは決してなく、記憶に残るようなディスカッションをするには日頃から自由に意見やアイデアを述べあう環境が必要でしょう。日々の自由な議論と継続、この二つを実践すれば自ずと道は拓け、独自の分野の開拓者になれるのではないのでしょうか。

平成 30 年度中谷賞奨励賞受賞のご報告

高次生命科学専攻 高次生体統御学分野

今村博臣

この度、平成 30 年度中谷賞奨励賞を受賞いたしました。この賞は医療機器メーカーのシスメックス株式会社の創業者である中谷太郎氏が設立した中谷電子計測技術振興財団が、医工計測技術について独創的な研究をしている 45 歳以下の研究者を表彰し授与するものです。なお、前年度には本研究科の松田道行教授が中谷賞大賞を受賞されています。私の受賞タイトルは「単一細胞レベルで生細胞内 ATP 濃度を画像化する技術の開発とその応用」です。アデノシン三リン酸(ATP)は、細胞内のエネルギーキャリアとしてはたらく極めて重要な代謝物質ですが、従来の ATP 計測法では生きた細胞内における ATP 濃度の動態を高い時空間分解能で調べることは不可能でした。十数年前のあるとき、私はバクテリアの ATP 合成酵素がもつ ϵ というサブユニットと蛍光タンパク質を組み合わせることでフェルスター共鳴エネルギー移動(FRET)原理に基づいた蛍光 ATP バイオセンサーを作ることができるのではないかと思ひ至り、それまでの研究を止めて完全に研究テーマを変える決心をしました。新しい研究テーマに取り組み作製したのが FRET 型蛍光 ATP バイオセンサーの ATeam です。ATeam を導入した細胞を蛍光顕微鏡で撮影し FRET 効率を計算することによって、単一の生きた細胞内部の ATP 濃度を高い時間分解能と高い定量性で画像化することができます。顕微鏡画像を覗きながら ATP 濃度をイメージングできていると最初に確信した時の感激は今でも忘れることができません。その後、蛍光 ATP バイオセンサーの改良を進め、並行して様々な生命現象や病態における細胞・組織内 ATP 濃度の時空間動態を明らかにしてきました。また、開発者として非常に嬉しいことに、現在これらの技術は国内外の多くの学術機関・企業において利用されるに至っています。ATP を始めとする代謝物の生体内における動態や機能についてはまだまだ不明な点が数多く残されており、蛍光バイオセンサーを使った代謝物計測によって今後も新たな科学的知見が多く生まれていくはずだと確信しています。

今回の受賞は、高次生体統御学分野の垣塚彰教授ならびに多くの大学院生や研究員、共同研究者とおこなった一連の研究が評価された結果だと思ひます。ここに深く感謝いたします。今回の受賞を励みに、研究のさらなる発展のために努力していく所存であります。今後とも一層のご指導ご鞭撻を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。



授賞式にて

第21回生命科学研究科シンポジウム報告

統合生命科学専攻 細胞認識学分野

上 村 匡

毎年7月上旬に開催される生命科学研究科シンポジウムは、生命科学研究科での最新の研究成果を公開の場で発表すると共に、大学院生・職員・教員を問わず研究科メンバーが交流する貴重な場を提供しつつ、21回目に至りました。2019年7月4日と5日に、それぞれ244名の方々が参加下さり、今回もホットなデータと議論が飛び交いました。

プログラムを作成するにあたり、生命科学研究科が、従来の学問分野の枠組みの中で語られていた生命現象を、ボーダーレスに研究するために設立された研究科であることを改めて思い返しました。この学際性こそが生命科学研究科のアイデンティティーであり、研究科シンポジウムはそのシンボルの一つです。そこで、動物、植物、微生物、ウイルスなどの研究材料は問わず、対象とする生命現象の共通項を拾って各セッションの演者を選定しました。また、例年プログラムはタイトにならざるを得ず、ともすれば議論を深めることが困難でした。そこで、今回は初めての試みとして、初日の夕刻にポスターセッションを設けたところ、計14題のポスターの前で議論が延々と続きました。さらに、座長を異なる分野に所属する准教授と助教のペアをお願いしたところ、浚刺と座を仕切っていただきました。二日間合わせて10セッション、計44演題の口頭発表が終了し、その後開催された交流会でも、所属を問わず皆様に懇親を深めていただきました。一方で、複数の課題も残りました。その一つは、ポスターセッションのような新しい試みを加えた分、事務室、特に総務掛の皆様のご負担が増えたことです。

最後になりましたが、開催に向けて奔走してくれた研究室メンバーや、ご支援をいただいた生命科学研究科の教職員の皆様に心より御礼申し上げます。



“Diversity for the Sake of Excellence”

統合生命科学専攻 細胞認識学分野

上 村 匡・服 部 佑佳子

ダイバーシティの推進は、世界トップレベルの研究開発を達成するために欠かせない戦略です。生命科学研究科では、性別あるいは職階を問わず、多くの皆様にご参加頂いてダイバーシティ推進を議論するセミナーを開催しています。昨年度と今年度は、細胞認識学分野がこのセミナーをお世話致しました。

平成31年2月20日に西村いく子先生(甲南大学・教授、日本学術振興会学術システム研究センター・副所長)を、そして、令和元年11月20日に鳥居啓子先生(テキサス大学・教授、名古屋大学WPI・客員教授)をお招きし、ダイバーシティ推進の一環として、いかに女性研究者の活躍を推進するかを議論しました。研究科や研究機関の枠を越え、昨年度は78名が、今年度は129名(いずれも男女比ほぼ同率)が参加して下さいました。西村先生も鳥居先生も植物科学の分野で活躍なさっていることもあり、セミナーの開催にあたっては、同じ生命科学研究科の河内孝之先生と荒木崇先生、そして両研究室の皆様のご尽力を賜りました。この場をかりて厚く御礼申し上げます。

このセミナーを通して、世話人である私たち自身も多くを学ばせて頂きました。まず、教授会などの意思決定機関に参加できる女性を3人以上にして複数の視点を採り入れることの重要性と、その目標を達成するための制度設計の具体例(研究機関へのインセンティブなど)を提示して頂きました。さらに、研究者を目指す個人々の生き方は様々であり、「全員がロールモデル」であるとのことご提言にも感銘を受けました。教員、特に教授の男女比が極端に偏っている京都大学の現状を見れば、優秀な女性を採用して多様かつ独創的な研究を推進し、京都大学ひいては日本のサイエンスの未来を拓かなければならない(diversity for the sake of excellence)との危機意識がヒシヒシと伝わってきました。

最後になりましたが、2回のセミナーのポスターは、いずれも総務掛長の神徳智恵様との合作です。ありがとうございました。



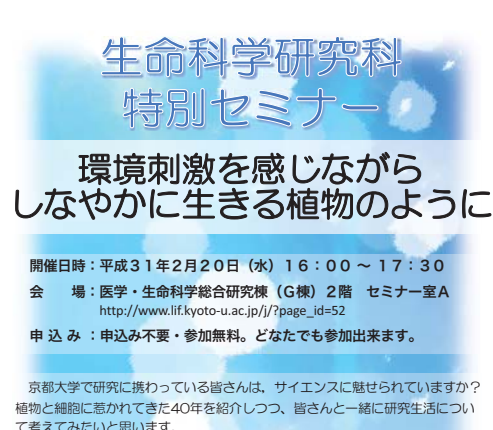
生命科学研究科
男女共同参画推進セミナー

日本人女性研究者、アメリカのアカデミアを生き抜く
研究室主宰・出産・育児・プロモーションへの調和的戦略のその後

開催日時：令和元年11月20日(水)
15:00～16:30

会 場：京都大学医学部創立百周年記念施設
芝蘭会館 稲盛ホール
<http://www.med.kyoto-u.ac.jp/shiran/>

申 込 み：申込み不要・参加無料。どなたでも参加出来ます。



生命科学研究科
特別セミナー

環境刺激を感じながら
しなやかに生きる植物のように

開催日時：平成31年2月20日(水) 16:00～17:30

会 場：医学・生命科学総合研究棟 (G棟) 2階 セミナー室A
http://www.lif.kyoto-u.ac.jp/j/?page_id=52

申 込 み：申込み不要・参加無料。どなたでも参加出来ます。

京都大学で研究に携わっている皆さんは、サイエンスに魅せられていますか？
植物と細胞に惹かれてきた40年を紹介しつつ、皆さんと一緒に研究生活について考えてみたいと思います。

国際学生セミナーから

新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、誠に残念ながら、本年度開催予定でありました第18回国際学生セミナーは中止となりました(2月27日)。

European Drosophila Research Conference に参加して

統合生命科学専攻 細胞認識学分野 博士後期課程1年

金岡泰哲

私は、「実践的生命科学英語コミュニケーションプログラム」のご支援を受けて、2019年9月5日から8日にかけてスイスのローザンヌで開催された European Drosophila Research Conference (EDRC)に参加し、ポスター発表を行わせていただきました。

EDRCにはヨーロッパだけでなく、アメリカやアジアなど世界中から研究者が参加しており、彼らの研究発表を聞くことで、世界のショウジョウバエ研究の潮流を知ることができました。また、この学会には自身の研究分野である代謝や神経科学の分野で最先端を走る研究者も多数参加していました。そのおかげで、ポスターセッションでは、普段自分が参考文献として読んでいた論文の著者と直接議論し、自身の研究テーマについて多くのコメントをいただく非常に貴重な機会が得られました。しかし、言いたいことがさっと英語で出てこないばかりに、議論が一問一答のような場面もあり、やはり日常的に英語でのコミュニケーションの練習をしていく必要があるなど痛感しました。

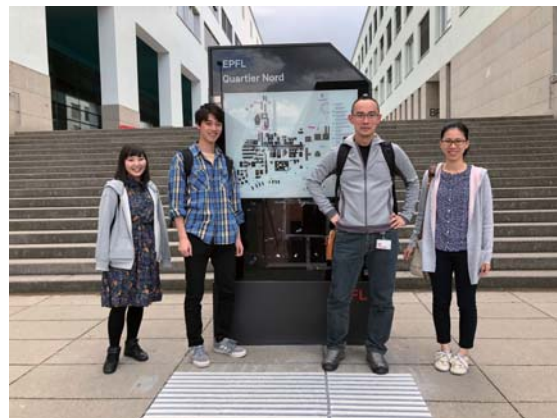
学会参加を通して何より印象的だったのは、参加者がサイエンスに情熱を持ちながらも、研究生生活を心から楽しんでいるのが見て取れたことです。学会終盤に行われた交流会で、老若男女問わず、音楽に合わせてダンスをしている人がある傍ら、ワイン片手に熱心にディスカッションをしている研究者がいる風景はとても心に残っています。

学会後には、スイス連邦工科大学の Bruno Lemaitre 教授の研究室を訪問しました。この訪問では、共有最先端機器施設や他機関との連携方法などについて話を聞くことができ、ヨーロッパでの研究環境について知ることができました。また、この派遣を通じて、ヨーロッパで研究生生活を送っているアジア人研究者ともたくさん交流することができたのも良い経験であったと感じています。留學生活の体験談や苦勞話を聞けたため、自身の今後の進路を決める上で非常に参考になりました。

最後になりましたが、派遣前に英語でのポスター発表の指導をしてくださった James Hejna 先生、日頃から研究指導をいただいている上村匡先生、服部佑佳子先生、そしてご支援をいただいた生命科学研究科のみなさまに心よりお礼申し上げます。



学会の交流会では、DJが絶えず音楽を流していた。



スイス連邦工科大学前での記念撮影

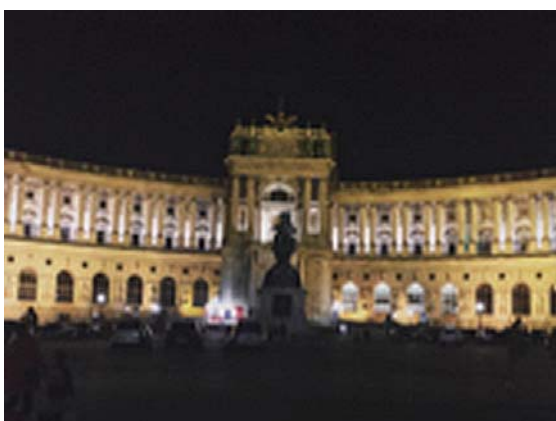
2019年10月20日から10月23日にかけて、実践的生命科学英語コミュニケーションプログラムのご支援の下、オーストリア ウィーンで開催された第七回 国際サイトカイン学会に参加させていただきました。本学会は感染症や慢性炎症疾患、自己免疫疾患などにおける最先端のサイトカイン研究を対象とした、年に一度開催される大規模な国際カンファレンスです。

私は自身が初めて筆頭著者として論文に発表した『インターフェロンの過剰産生による骨疾患の研究』の結果をもって学会に挑みました。それまで国際学会へ参加した経験は何度もあったものの、それらは日本で開催された国際学会であり、真の意味での国際学会への参加は初めての体験でした。

まず特筆すべき点は会場の美しさでした。会場はかつてハプスブルク家の歴代皇帝が住んでいた旧王宮であるホーフブルク宮殿内に会議場が設置され、その内装があまりに壮麗であり、しばらく言葉を失いました。その雰囲気の中、世界トップの免疫学者達によるハイクオリティな発表とディスカッションが次々と展開され、言葉にならない恍惚感を覚えました。

私は惜しくもその会場での口頭発表の機会を逃してしまいましたが、与えられたポスター発表の機会に全力を注ぐことにしました。いざ会場に立ってみると、これまで経験した国内での学会と海外での学会では、参加者達の熱気が大きく違っていることに気づきました。そこでの参加者達は各々の研究を熱く語っており、会場全体がサイエンスで沸き立っているような感じでした。私もそれに負けずに、積極的に参加者を捕まえ、自身の研究を売り込みました。ポスターはあらかじめデータを厳選しており5分で話せる内容にしていました。通りゆく参加者に“Excuse me! Please give your 5 minutes!” と半ば強引に話を聞いてもらい(実際は15分以上話し合いましたが)、議論を深めることができました。この学会を通して、自身の目標であるグローバルに活躍できる研究者への歩みを大きく前進できたと実感しております。

最後になりましたが、学会参加の機会をいただいた指導教官の藤田尚志先生と、ご支援を賜りました生命科学研究科の関係者の皆様に深い感謝の意を表します。



ホーフブルグ宮殿



ホーフブルグ宮殿内の会場

NTU Summer Program + N1 Biotechnology 参加報告

高次生命科学専攻 理論生物学分野

吉戸香奈

2019年8月18日から8月31日の2週間、国立台湾大学(NTU: National Taiwan University)で行われた“NTU Summer Program +N1 Biotechnology”に参加しました。本学からの参加者は、福田侑花、藪田和生、吉戸香奈の3名でした。このプログラムでは、筑波大学などの他大学からの参加学生とともに、主に2つの活動“NTUの先生方の授業の受講”および“配属先の研究室での研究活動”を行いました。

NTUの先生方の講義では、生物学的な知識に加え、実験の原理なども深く学ぶ良い機会となりました。また、先生方が熱意を持ってお話しされているのを感じることができ、とても印象深い講義となりました。

さらに、研究活動については、私は医学部の李建國先生の研究室に配属していただき、大学院生の方のプロジェクトを手伝わせていただくという形で、異なる刺激下における樹状細胞の分化に関する実験を行いました。私自身、免疫反応の数理モデルを用いて理論研究を行なっておりますが、免疫学に関する実験は初めてだったため、いつも論文を読む際に目にしていた“表面抗原やサイトカインの発現の検出”という実験免疫学における基本的な技術を身をもって学ぶことができました。さらに、李建國先生には得られた実験結果に関するディスカッションを行う時間をいただき、基本的な実験結果の解釈に加え、未解決の問題に対する議論に関してもお話しすることができ、非常に良い経験となりました。特に、先生が熱意を持って楽しそうにお話しされていたのが印象的で、自分自身の研究への向き合い方についても考える良い機会となりました。また、研究室の学生さんや研究員の方々には、実験や解析について丁寧に教えていただいたり、今回私が触れることのなかった実験を見せていただいたりと、非常にお世話になりました。

最終日には、配属先で行なった研究に関する口頭発表を行いました。この準備にあたって、李建國先生だけでなく、研究室の方々にも様々なアドバイスをいただくことができ、初めての英語での研究発表ではありましたが、光栄なことにBest Presentationに選出していただきました。しかし、質疑応答では、自分の考えを英語で伝えることの難しさを感じ、英語力の向上の必要性を痛感しました。



配属先の研究室の方々との集合写真
配属先の研究室の方々と山登りにも行きました。

また、本プログラムでは、Life TA として NTU の学生さんに台湾での生活のサポートをしていただきました。研究活動後に夜市などの様々なところへ夕食に連れて行っていただいたり、休日には台北 101 や九份などの観光地を案内していただいたりと、台湾の食や文化に触れることもできました。



発表の様子(左)と最終日の Farewell Party での集合写真(右)



NTU の学生と他大学からの参加学生たちとの写真

さらに、本プログラムを通して、視野を広く持つことの重要性を実感することができました。NTU の先生方、学生の方々、そして参加学生の方々と、研究のことだけでなく研究生活について等も話す機会が多く、自分の所属している大学院や研究室の中にいるだけでは気付くことができなかった考え方に触れることができました。また、複数名の学部生の方が参加されていたことも印象的でした。大学院生である大部分の参加者に比べて実験や研究の経験が少ないながらも、研究活動や発表に熱心に取り組んでいる姿を見て、私自身、非常に刺激を受けました。これらの経験を生かし、今後の研究活動にも励んでいきたいと思えます。

最後になりましたが、本プログラムへの参加にあたってご支援いただきました千坂修先生、James Hejna 先生、そして生命科学科の皆様に心より感謝申し上げます。

教員人事異動

○教員転出状況

【令和元年度】

常勤教員

役職	氏名	年月日	転出先
教授	根岸 学	平成31年3月31日	定年退職
准教授	大澤 志津江	平成31年3月31日	辞職(名古屋大学教授へ)
助教	梶川 昌孝	平成31年3月31日	辞職(近畿大学講師へ)
助教	今城 正道	平成31年3月31日	辞職(北海道大学特任准教授へ)
助教	笹岡 紀男	令和1年8月31日	辞職(民間企業へ)

特定有期雇用教員

役職	氏名	年月日	転出先
特定助教	鈴木 裕輔	令和1年6月30日	辞職(生命科学研究科助教へ)

協力・連携講座

役職	氏名	年月日	転出先
准教授	井上 康博	平成31年3月31日	担当終了(大学院工学研究科教授へ)

○教員採用状況

【令和元年度】

常勤教員

役職	氏名	任命日	分野
教授	中野 雄司	平成31年4月1日	全能性統御機構学分野
講師	山野 隆志	平成31年4月1日	微生物細胞機構学分野 (同分野助教より)
助教	安居 佑季子	平成31年4月1日	遺伝子特性学分野
助教	辻 敬典	令和1年6月1日	微生物細胞機構学分野 (同分野研究員より)
助教	佐藤 慎哉	令和1年6月1日	生体制御学分野 (同分野特定助教より)
助教	鈴木 裕輔	令和1年7月1日	脳機能発達再生制御学分野 (同分野特定助教より)
准教授	菅田 浩司	令和1年10月1日	システム機能学分野
准教授	伊福 健太郎	令和2年1月1日	全能性統御機構学分野 (同分野助教より)

特定有期雇用教員

役職	氏名	任命日	分野
特定助教	小林 稔	平成31年4月1日	がん細胞生物学分野 (同分野特定研究員より)
特定教授	磯部 圭佑	令和2年1月1日	産学共同講座「先端イメージング学 講座」光の時空間制御学分野

協力・連携講座

役職	氏名	任命日	分野
助教	村本 裕紀子	平成31年4月1日	(協力)微細構造ウイルス学分野
講師	OKEYO Kennedy-Omondi (オケヨ ケネディ オモンディ)	令和1年9月1日	(協力)適応力学分野

編集後記

今年もまた一年間研究生生活を送れましたことに感謝せずにはおれません。昨年末より例年になく暖かであったせいか、12月になっても咲いている朝顔を出町柳付近と宇治市で見つけました。どうなっているのであろうと思っておりましたら、友人によればそれは朝顔ではなく、西洋朝顔ではないかとのことでした。特徴をみればまさにそのようで、それであればやる気になれば、通常の日本の冬でも比較的簡単に咲くそうです。単なる私の無知ですが、身近な生物学実習です。生物学といえば、世間では困ったウイルスが蔓延っております。専門分野では無いものの、平均よりは高い情報力を持っている環境にいる利点を生かし、人命に関わる事ですので、人に尋ねられれば誤った情報を修正し、間違いのない情報をお伝えする等、何か貢献できればと思っております。本年もご寄稿いただきました先生方、学生の皆様、ならびに事務室の方々のおかげで本広報誌の発行の運びとなりました。ありがとうございました。

(遺伝子伝達学分野 中世古)